

「短歌研究」十月号を読んで 屋良健一郎

「短歌研究」十月号は「現代短歌評論賞」発表号である。今年の課題は「短歌総合誌のあたらしい役割」で、受賞は雲嶋聰「黒衣の憂鬱—編集者・中井英夫論」。現代短歌にとって純粹読者の獲得が課題だと指摘。現状を開拓するヒントを中井英夫に求める。中城ふみ子と春日井建への中井の向き合いの方を踏まえた上で、新人に続けて作品を発表させる。新人への批評を掲載する、短歌以外のジャンルの人々に新人を売り出す、といった手法を総合誌に提案している。過去の出来事を主として論じながらも、現在の総合誌の課題と展望を的確に示した説得力のある評論だ。

ところで、この評論は「加筆訂正版」として掲載されている。「中城ふみ子の歌が一首も挙がっていない」（篠弘）といった選考座談会での注文を受けて加筆修正したのだろう（掲載されたものには中城の歌が引かれている）。受賞作には手を入れずに応募時のまで掲載すべきだという考え方もあるが、私は評論に限つては加筆修正したもののが掲載は良いことだと思う。評論集を出版しない限り、基本的には一度発表した評論には加筆修正の機会はないだろうから、選考座談会での意見を取り入れて現時点でのより良いものを発表することは、筆者・読者の双方にとっても、その評論を踏まえて書こうとする者にとっても良いことだ。

候補作Ⅰの鈴木恵子「未来へ」は、総合誌それぞれが短歌や連

載、評に割いている頁数について、自身で集計したデータを示した上で「評」の少なさを指摘する。自らの手で雑誌をめくつて調べる、という地道だが大切な作業に改めて気付かされる。また、佐佐木幸綱が選考座談会で「今、現代歌人はみな古典がダメだよね」というように、古典が本格的に論じられることが少ない中、総合誌の古典の扱いを述べた鷺沢朱理の視点も興味深い。

このように示唆に富む「現代短歌評論賞」だが、やや気になつたのは受賞作以外の「抄録」という掲載の在り方である。二〇枚うち三〇枚相当の評論から数カ所を切り貼りする方法では、筆者の問題関心が伝わりにくくなってしまう。たとえば、二三川練「これから短歌のために 短歌総合誌に求めること」では、「短歌総合誌についてどのような批評が為されているのかを例挙し、問題を整理していく」と思う。」の後に、阿波野巧也と濱松哲朗の名と彼らの書いた文章のタイトルが挙げられると「(中略)」となり、評論の最後のまとめ部分に飛ぶ。二三川が阿波野や濱松の文章を踏まえて、どのように「問題を整理」したのかが気になる(「中略」の部分にそれがあるのだろう)。抄録よりはむしろ要旨を掲載した方が、評論の全体像が読者に伝わるかもしれない。

短歌作品は、受賞を逃して一部だけ掲載された場合、他の歌は別の機会に使うことが可能だが、評論は抄録として論の核心部分が載ると、同じ文を改めて発表するというのは難しいのではないだろうか。受賞作の「加筆訂正版」を載せたように、候補作についても選考座談会での意見を踏まえて直したもの全文を載せてはどうだろう(同じ号にでなくとも、数ヶ月に分けるなど)。選考座談会を読んでいて、受賞作以外にも心ひかれたのである。